

アウグスティヌス『告白録』1～9巻のキアスムス構造に関する考察

—異郷訪問譚の構造的特性が構成に与えた影響—

Consideration about the chiasmic structure in Augustine's "Confessions"

—Influence of the character as *Ikyou-houmon-tan*—大喜多 紀明¹¹京都民俗学会Noriaki Ohgita¹¹Bulletin of the Folklore Society of Kyoto

キーワード：アウグスティヌス，告白録，キアスムス構造

Key words：Augustine, Augustine's "Confessions", Chiasmus

抄録

アウグスティヌス著『告白録』の1～9巻は、キアスムス構造により構成されている。本稿において、この構成がもたらされた原因を検討したところ、この構成に、①アウグスティヌスの心性に基づく影響、および、②異郷訪問譚の構造的特性に基づく影響があることを示す知見を得た。

1. はじめに

哲学者である加藤信朗は、著書『アウグスティヌス『告白録』講義』^[1]のなかで、アウグスティヌスの著作『告白録』¹の自伝的部分（第1～9巻）²に、〈離向（aversio）〉と〈帰向（conversio）〉の過程に基づく構成的解釈を施した。

加藤の知見を受けた宮本^[2]は、加藤が示した当該箇所への構成的解釈に対して以下のように述べた^[2]。

人はラテン人アウグスティヌスの文学に、なぜヘブライ的文学用法をうかがうのかということに依然不審に思われるかもしれない。

しかし、われわれはアウグスティヌスが、旧約全聖書をほぼ暗記に近いほどに熟知し、聖書の言葉が彼の身にしみこみ彼の身体（のリズム）そのものに受肉していることを知っている。とすれば、身体を張って生きたアウグスティヌスが、聖書のヘブライ的言語用法を『告白録』の著作において、その身体的行為として表わすのも自らなることなのである。その意味で、アウグスティヌスの言語表現において、今後ヘブライ的用法が洞察されることが期待されるのである。

つまり宮本は、加藤が示した解釈を、アウグスティヌス自身にしみこんだ聖書のヘブライ的修辭によるものと見做したのである。なお、ここで言うところの「聖書のヘブライ的言語用法」とはキアスムス構造³のことであり、宮本論文^[2]では、当該箇所に関するキアスムス構造の図式を掲載している。さらに、山田論文^[3]では、宮本論文の図式にO'Donnellの説^[4]に基づく知見を加えたキアスムス構造の図表を掲載した⁴。この宮本論文に掲載されたキアスムスの図表を、本稿では〔表1〕として転載する。

ところで、アウグスティヌスが自らの半生を『告白録』で語る必要があったのかという点について荻野は以下のように述べている^[5]。

つまり回心はまぎれもなく私自身の体験でありながら、しかしこの出来事を引き起こした真の主体は神自身に他ならず、その意味でアウグスティヌスの生はいわば歴史的事実として神の業が演じられた一種の「舞台」なのだとも言える。救済史（*historia salutis*）の出来事は、たとえそれがいかに壮大で図り難い深意に充ちたものであっても、具体的な歴史の人物・事件を通じて

成就される以外にない。しかもその最も身近な出現が、他ならぬ自らの歩みの途上において現成したのであった。少なくともアウグスティヌス自身はそのような意識で書いていると理解されるべきであり、またこの視点がない限り、『告白録』という書物はそもそも成立しえなかつたに違いない。

つまり、アウグスティヌスの生そのものが神の業が演じられた「舞台」であり、自身の半生を神により引き起こされた救済史上の出来事の出現と見做し、これを物語として綴ったものが『告白録』の「自伝箇所」なのである。

「自伝箇所」は、アウグスティヌス自身がいったん神から離れたのちに再び神のもとへと帰ってくる往還の過程を綴った形式である。このことより、「自伝箇所」を一つの物語と見做せば、異郷訪問譚として分類できるのではないかと筆者は推測している。

一方、文化人類学者である大林⁶⁾は、異郷訪問譚には裏返し構造⁵⁾と呼ばれる構造上の「共通の約束」⁶⁾があることを述べたうえで、大林論文⁶⁾において、いくつかの日本の異郷訪問譚を例示し、これらが裏返し構造に基づく構成であることを紹介した。

なお、キアスムス構造と裏返し構造の関係については、大喜多論文⁷⁾では、キアスムス構造に内包される形式として裏返し構造を位置付けた。

ここで、「自伝箇所」が異郷訪問譚であると仮定するならば、大林が述べた異郷訪問譚の構造上の「共通の約束」であるところの裏返し構造が、当該箇所の構成にも何らかの形で表出する可能性があることとなる。

以上を踏まえ、本稿では、当該箇所の構造と、異郷訪問譚の特性的構造である裏返し構造との関連についての検証を行うこととする。なお、上述のように、そもそも宮本は、「自伝箇所」がキアスムス構造である理由を、アウグスティヌスの心性に聖書的ヘブライの修辞技法が浸透したことに置いている。

本稿では、まず2節において、そもそもキアスムス構造とはどのような構造かの確認をし、その特徴を提示する。そのうえで、3節では、山田論文が提示した「自伝箇所」にみとめられるキアスムス構造を、2節で提示したキアスムス構造の特

徴と照合する。

その一方、4節では、異郷訪問譚の定義を示したうえで、「自伝箇所」がはたして異郷訪問譚と言い得るかの確認を行う。さらに5節では、異郷訪問譚の構造的な特性とされる裏返し構造を紹介し、その特徴を提示したうえで、裏返し構造とキアスムス構造との関係性を論じる。

これを踏まえ、6節では、裏返し構造の観点から「自伝箇所」の構成に対する再評価を行うこととする。

2. キアスムス構造

キアスムス構造は、聖書に頻用される修辞構造である。以下、中澤⁸⁾に掲載された、「マタイの福音書」の5章3節から7章27節に見いだされるキアスムス構造を示す。

A：序論；御国の民の特権（5：3-16）

B：主部の序；律法を確立することの重要性（5：17-20）

C：御国の義；律法の伝承の中で（5：21-48）

D：義の業の最初；施し（6：1-4）

E：義の業の中心；祈り（6：5-15）

D'：義の業の最後；断食（6：16-18）

C'：御国の義；神に対する信頼の中で（6：19-7：11）

B'：主部の結語；律法を確立するための原理（7：12）

A'：結論；御国の民への招き（7：13-27）

この場合、AとA'、BとB'、CとC'、DとD'がそれぞれ対応している。つまり構文上に見いだされる、例えばA→B→C→D→E⁶⁾→D'→C'→B'→A'のような、対応する要素の配列が構文の前半部分と後半部分で逆転する構造⁷⁾を本稿ではキアスムス構造と呼ぶ。

なお、聖書の多くの箇所には上述のようなキアスムス構造が見いだされることから、キアスムス構造は、聖書に使用される代表的な修辞技法と見做されている⁹⁾¹⁰⁾。

ところで、アウグスティヌスの修辞技法は秀逸である。この点につき、『告白録』の第1巻のアウグスティヌスの修辞的技術についての荻野の言葉¹¹⁾を拝借すれば、「このわずか十数行の短い叙述は、聖句の引用、祈り、自問自答といった複層の

言語によって綴り合わされており、魂から迸る真摯な呼びかけでありつつも、他面、彫琢され抜いた緊密な構成を誇り、卓抜な修辭的技巧が施されている部分でもある」という。

さらに、アウグスティヌスにおけるキアスムス構造の使用については、荻野が、冒頭の第一段に聖書的ヘブライの修辭である並行法とキアスムス構造が施されている事例を取り上げ、次のように紹介している⁵⁾。

「大いなる主、限りなく賛美される主」という詩篇一四四・三前半は、四七・一、九五・四にも全く同じ表現を見出すことができる。つまりこの言い方そのものは、実質的な内容を盛り込むための部分というより、むしろ賛美の定形句・序詞であると考えられる。ただここで（一見何気なく）二つの詩篇が接合された結果、頭韻 (*magnus-magna*) と行末の並行句 (*valde-non est numerus*) との効果により一行と二行の間に極めて鮮明な並行表現が浮かび上がってくるようになった。「並行法」 (*parallelismus*) はヘブル詩文の最も基本的な技法であるが、アウグスティヌスはここで引用箇所と配置に工夫を施すことによって、その修辭的效果を更に高めていることが分かる。また二行目が (ABBA 型の) 「交差配列」 (*chiasmus*) を構成していることは改めて言うまでもない。

以上のように、聖書的修辭技法であるキアスムス構造はアウグスティヌスが駆使する技法の一つである⁸⁾。

3. 「自伝箇所」に対する構成的解釈

本節では、「自伝箇所」に見いだされるキアスムス構造を紹介する。当該箇所のキアスムス構造は、そもそも『告白録』の2~4巻と5~9巻が〈離向〉と〈帰向〉の関係にあるとする加藤の論に基づき、宮本が提示したものである。なお「自伝箇所」にみとめられるキアスムス構造に関する図式については、宮本論文および山田論文にて紹介されている。一方、山田論文で紹介されたキアスムス構造の場合は、基本的には宮本の図式⁹⁾にしたがいつつも⁹⁾、これに O'Donnell の説を含めた項目を追加¹⁰⁾している。

なお、O'Donnell の説については、山田は次のよ

うに解説している³⁾。

O'Donnell (1992, v.1, pp.xxxv-xxxvi) は、『告白』の内に「ヨハネの手紙一」2:16を基礎にした「三誘惑構造」が見出せるとしている。即ち、2巻で「肉の欲望」 [*concupiscentia carnis*] が、3巻では「目の欲望」が [*concupiscentia oculorum*] が、4巻では「世俗的野心」 [*ambitio saeculi*] が語られており、対象的に6巻では世俗的野心の克服が、7巻では目の欲望からの克服が、8巻では肉の欲望からの克服が示されているとするのである。この O'Donnell の説は『告白』前半巻に伏在する対称的構造を示した点で特筆に値する。

つまり、O'Donnell の説とは、「自伝箇所」にいわゆる「三誘惑構造」が見いだせるというものであり、当該箇所の2巻から8巻が、順に、「肉の欲望」・「目の欲望」・「世俗的野心」・「世俗的野心」の克服・「目の欲望」の克服・「肉の欲望」の克服の要素からなるという説のことである。以上を踏まえ、本稿では山田の図式を表1として紹介し、本稿の論の前提としている。

ここで、表1に関する説明をする。表1では、まず、(A) から (A') に至る要素が、「自伝箇所」の1巻から8巻にそれぞれ相当することが示されている。そのうえで、それぞれの要素に関する「宮本の説による要素」に基づく記載が書かれている。さらに、それぞれの要素に対応するアウグスティヌスの年齢に関する記載があり、そのうえで、「O'Donnell の説による要素」に基づく記載が書かれている。

表1の「宮本の説による要素」に基づく対応によれば、例えば (A) の「修辭学の学習」と「母モニカの信仰と受洗の延期」は、(A') の「修辭学教師を退く」と「受洗と母モニカと共なる信仰」が対応している。また (B) の「悪しき仲間との交際」と「梨の木の実」の盗みは (B') の「善き仲間との交際」と「無花果の木」の下での庭園の回心が対応している。同様、(C) と (C')、(D) と (D') がそれぞれ対応している。

また、表1の「O'Donnell の説による要素」に基づく対応によれば、(A) の「三つの誘惑以前」が (A') の「三つの誘惑以後」に対応しており、(B) の「肉の欲望」が (B') の「肉の欲望の克服」に、

(C)の「目の欲望」が(C')の「目の欲望の克服」に、(D)の「世俗的野心」が(D')の「世俗的野心」にそれぞれ対応している。

つまり(A)と(A'),(B)と(B'),(C)と(C'),(D)と(D')がそれぞれ対応しており、後半要素の配列順が前半とは逆転している。したがって、「自伝箇所」は2節で述べたキアスムス構造の特徴に合致することがわかる。

4. 異郷訪問譚としての「自伝箇所」

本節では、「自伝箇所」が異郷訪問譚と呼びうるかの検証を行う。

まず1節では荻野の論^[9]に基づき、「自伝箇所」が、「アウグスティヌスの生そのものが神の業が演じられた「舞台」であり、自身の半生を神により引き起こされた救済史上の出来事の出現と見做し」た物語と言えることを述べた。この荻野の論に基づき、本稿では「自伝箇所」を、アウグスティヌスが、自らの半生を、神の業が介在した特別の出来事と認識したうえで書いた物語と見做すこととする。

ところで異郷訪問譚とは、一般的には、主人公が主人公にとっての異郷を訪問する物語形式を指す。本稿では、勝俣論文^[11]における異郷訪問譚の定義を「自伝箇所」と照合することにより、「自伝箇所」が異郷訪問譚であるかの確認をする。

勝俣は、日本の上代の異郷訪問譚にみとめられる特徴について次のように述べた^[11]。なお、数字・下線は筆者によるものである。

異郷訪問譚とは、(a)現世の地上世界、神話であれば葦原中国から、それ以外の異郷を訪れる話である。(b)訪問者は神か人間であり、(c)異郷へ行くためには、特殊な手段・方法が必要とされる。(d)また、多くの場合、選ばれた少数者のみしか異郷を訪れることはできない。

つまり上述の勝俣論文によれば、異郷訪問譚の特徴は以下の(a)~(d)である。

- (a)訪問者が訪問者にとっての異郷¹¹を訪問する形式である。
- (b)訪問者は神か人間である。
- (c)訪問者は、特殊な方法・手段により、異郷を訪問する。

(d)多くの場合、選ばれた者しか異郷を訪問できない。

本稿では、上述の(a)~(d)で示した全ての特徴と合致する形式による物語を「異郷訪問譚」と呼ぶことにする。

ここで、以下、「自伝箇所」を本稿の異郷訪問譚の定義と照合してみる。

◆特徴(a):「自伝箇所」の場合、物語の主人公はアウグスティヌス自身である。アウグスティヌスの「自伝箇所」には、彼自身による神と魂を探求する道程が述べられている。アウグスティヌスは、母モニカの懐を離れ、彼自身による探求の過程を歩くが、再び母の信仰の下に戻ってくる。ここで、母とともにある信仰を「故郷」と見做せば、探求の過程そのものが、彼自身にとっての「異郷」での旅程であったと言える¹²。

◆特徴(b):アウグスティヌスは「人間」である。

◆特徴(c):アウグスティヌスは、荻野の論にあるように、少なくとも彼自身の意識のなかでは、「神の業」が介在するという「特殊な手段」により、神と魂を探求する過程(=「異郷」)を歩いた。

◆特徴(d):アウグスティヌスによる探求は、荻野の論によれば、「この出来事を引き起こした真の主体は神自身に他なら」ない。つまり、彼の探求は、神により「選ばれた者」による訪問に相当する。

以上より、「自伝箇所」は異郷訪問譚の特徴(a)~(d)を満たしているので異郷訪問譚であることが確認できた。

5. 裏返し構造

ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップは、ルーマニアの昔話「兵士としての少女」が以下の構成からなることを見いだした¹³。

「兵士としての少女」の構造

- I: 欠如:
- II: 虚偽:
- III: 試練:

- IV : 暴虐:
IV' : 暴虐の除去
III' : 試練の除去
II' : 虚偽の除去
I' : 欠如の除去

大林¹⁶⁾はポップの知見を受け、ポップが「兵士としての少女」に見いだした構成を「裏返し構造」と名付けた。

大林論文ではこの構造を、日本の異郷訪問譚である「イザナキの黄泉国訪問譚」、「神功征韓譚」、「浦島子」、「甲賀三郎」に当てはめることにより、これらが裏返し構造であることを確認している¹⁴⁾。また、これにより、大林は裏返し構造を、異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」と推認した。本稿は、この大林の推認を前提としている。

裏返し構造に関する特徴を、大林は以下のように述べている¹⁶⁾。

つまり、前半で問題となったいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ同じテーマが問題になっていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとっている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去という形になっている。早く言えば、ポップの方法は、構造分析における syntagmatic な見方と、 paradigmatic な見方の双方を統合する試みと言えよう。

つまり裏返し構造の第1番目の特徴は、前半の要素が後半では逆の順序に配列している点である¹⁵⁾。また第2番目の特徴は、後半の要素が、対応する前半の要素に対する否定・対立のような、言わば対照的な要素となる点である¹⁶⁾。

大喜多論文¹⁷⁾では、キアスムス構造と裏返し構造の関係が、キアスムス構造に裏返し構造が内包される関係であると述べたのであるが、ここであらためて、特徴AおよびBを、キアスムス構造の特徴と比較してみる。

2節では、キアスムス構造の特徴とは、「対応する要素の配列が構文の前半部分と後半部分で逆転する構造」と述べた。一方、特徴Aとは、「前半の要素が後半では逆の順序に配列している点」である。ここでのキアスムス構造の特徴が指

すものと、特徴Aが指すものは同一と見做すことができる。そこで本稿では、特徴Aとキアスムス構造の特徴を等価とし、キアスムス構造の特徴を持ち、かつ、特徴Bを満たす特徴を持つ場合、これを裏返し構造と見做すこととする。

6. 「自伝箇所」の構造に関する再評価

3節では、「自伝箇所」が、山田の説によればキアスムス構造であることを述べた。本節では、山田論文より引用した表1での、「宮本の説による要素」に基づく各対応と、「O'Donnellの説による要素」に基づく各対応について、裏返し構造の特徴Aおよび特徴Bとの照合を行いたい。

まず特徴Aについてである。このことについては、5節で述べたように、特徴Aはキアスムス構造の特徴と同じである。かつ、3節で示したように、「自伝箇所」はキアスムス構造の特徴に当てはまるのであるから、したがって、特徴Aにも当てはまることになる。

続いて特徴Bについてである。ここでは、「宮本の説による要素」に基づく対応と、「O'Donnellの説による要素」に基づく対応それぞれを特徴Bと照合する。

6.1. 宮本の説による要素

本節では、「宮本の説による要素」に基づく対応を特徴Bと照合する。なお特徴Bは、「後半の要素が、対応する前半の要素に対する否定・対立のような、言わば対照的な要素となる」というものである。

— (A) と (A') の対応

(A) 修辞学の学習

母モニカの信仰と受洗の延期

(A') 修辞学教師を退く

受洗と母モニカと共なる信仰

ここでの(A)「修辞学の学習」は、アウグスティヌスは本人の意思とかかわらず、親により修辞学の学習を事実上強要されたことが描かれており、一方、(A')「修辞学教師を退く」は、世で用いられるための方便としての修辞学教師の職を辞したことを指す。このように、双方は「対照的」な意味を持つ。また(A)は、アウグスティヌスは母モニカの信仰の下にはあったものの受洗を延期した場面である。対し、(A')ではアウグスティヌス

は受洗し、母モニカの信仰的な交わりによる体験が語られる。ここでも双方は「対照的」である。

— (B) と (B') の対応

(B) 悪しき仲間との交際

「梨の木の実」の盗み

(B') 善き仲間との交際

「無花果の木」の下での庭園の回心

(B) では、「悪しき仲間との交際」があるのに対し、(B') には「対照的」に、シンプリキアヌス、ポンティキアヌス、アリピウスらとの「善き仲間との交際」が配置されている。また、(B) の「梨の木」と (B') の「無花果の木」は、ともに、エデンの園の中央に生えていたとされる木を連想させるのだが、一方は「盗み」がテーマであるのに対し他方は「回心」がテーマであり、これも「対照的」である。

— (C) と (C') の対応

(C) 『ホルテンシウス』と聖書への失望

マニ教への入信

(C') 「プラトン派の書物」と聖書の研究

マニ教との決別

(C) と (C') にはともに聖書に関するテーマが描かれるが、一方は「失望」についてであり他方は「研究」についてである。また、マニ教への「入信」と「決別」も対応しており、この関係も「対照的」なものである。

— (D) と (D') の対応

(D) 内縁の女性との出会い

物的なものに囚われ霊的なものを見ない

(D') アンブロシウスによる聖書の霊的意味の開示

内縁の女性との別れ

(D) と (D') にはアウグスティヌスと内縁の女性との関係が描かれているが、一方は「出会い」の様子であるのに対し、他方は「別れ」についてである。また、彼が「霊的」なものを尊重しない状況と尊重する状況も「対照的」である。

以上のように、「宮本の説による要素」に基づく対応を特徴 B と照合した場合、(A) と (A'), (B)

と (B'), (C) と (C'), (D) と (D') の全てが「対照的」な関係であるため特徴 B に当てはまるのがわかる。

6.2. O'Donnell の説による要素

本節では、「O'Donnell の説による要素」に基づく対応を特徴 B と照合したい。

「三つの誘惑」とは、O'Donnell の説によれば、「肉の欲望」、「目の欲望」、「世俗的野心」に関する誘惑である。O'Donnell はこれらの誘惑が「自伝箇所」において、2 巻：「肉の誘惑」、3 巻：「目の誘惑」、4 巻：「世俗的野心」、6 巻：「世俗的野心」の克服、7 巻：「目の誘惑」の克服、8 巻：「肉の欲望」の克服」と配置されていると解釈した。

山田は、この「三つの誘惑」にかかわる一連の要素を、宮本が示したキアスムス構造の (B), (C), (D), (D'), (C'), (B') に当てはめた。また、1 巻を「三つの誘惑以前」、9 巻を「三つの誘惑以後」として、それぞれ (A), (A') に当てはめた。

巻	O'Donnell の説	キアスムス構造
1 巻	「三つの誘惑以前」	・・・ (A)
2 巻	「肉の欲望」	・・・ (B)
3 巻	「目の欲望」	・・・ (C)
4 巻	「世俗的野心」	・・・ (D)
6 巻	「世俗的野心」の克服	・・・ (D')
7 巻	「目の欲望」の克服	・・・ (C')
8 巻	「肉の欲望」の克服	・・・ (B')
9 巻	「三つの誘惑以後」	・・・ (A')

なお、(B) と (B') は「肉の欲望」と「肉の欲望」の克服が対応しているのだが、ここでの「克服」とは、欲望により惑っていた状態が「除去」されたことを意味する。また、「肉の欲望」に惑う状況と「肉の欲望」を克服した状況は「対照的」なものである。これは「肉の欲望」に限らず、「目の欲望」、「世俗的野心」にも同様である。

また、(A) と (A') の「三つの誘惑以前」と「三つの誘惑以後」についてもやはり「対照的」である。

以上より、「O'Donnell の説による要素」に基づく各対応についても全てが、後半の各要素が前半要素を「除去」する意味、もしくは「対照的」であるので、これは特徴 B に当てはまるものである。

しかるに、6.1 節と 6.2 節双方により得た知見により、「自伝箇所」は裏返し構造の特徴 B に合致す

ると言える。また、3節の知見を踏まえれば特徴Aにも合致するので、「自伝箇所」は裏返し構造であると言える。

7. 考察

「自伝箇所」にキアスムス構造が見いだせることについて、宮本は、アウグスティヌス自身にしみこんだ聖書のヘブライ的修辞による影響（つまり、アウグスティヌスの心性）に起因するものと考えた。そもそも、アウグスティヌス自身が修辞学に精通しており、「自伝箇所」の冒頭にも、並行構造やキアスムス構造のような聖書に基づく修辞技法を使用しているのである。このことから、アウグスティヌスが「自伝箇所」を執筆する際、全体的な構成にキアスムス構造を意図的に組み込んだことは容易に推測することができる。

他方、「自伝箇所」は、アウグスティヌス自身の「心の遍歴」が綴られた物語である。つまり、主人公であるアウグスティヌス自身が、いったん神のもとを離れ、のちに再び神のもとへと帰ってくるという、いわば往還の過程が綴られた物語なのである。そこで筆者は、彼の往還の道程を異郷への訪問と見做せば、「自伝箇所」は異郷訪問譚に類別できるのではないかと考えた。4節では「自伝箇所」に、勝俣論文に基づく異郷訪問譚の定義を

照合したところ、「自伝箇所」が異郷訪問譚の特徴を有することが確認できた。

なお、5節に示したように、異郷訪問譚の場合、裏返し構造を持つことが知られている。これを踏まえ、6節において、裏返し構造の特徴を「自伝箇所」に当てはめてみたところ、「自伝箇所」が裏返し構造であることがわかった。つまりこのことは、「自伝箇所」に見いだされる構成が異郷訪問譚の構造的特性に基づくものでもあることを示唆している。

以上の知見より、「自伝箇所」の構成が決定された原因を次のように示すことができる。

- ①アウグスティヌスの心性に基づく影響
- ②異郷訪問譚の構造的特性に基づく影響

筆者としては、上述の2要因を二者択一的なものとしては考えていない。むしろ、双方の影響により、「自伝箇所」の構成が決定されたのではないかと思っている。

本稿では、聖書的な技法の影響を受けた『告白録』を扱った。それでは、聖書そのものはどうか。筆者としては、聖書に内包された異郷訪問譚の場合についても裏返し構造を含んだ観点から検証を行いたいと考えている。

(A)	1巻	修辞学の学習		1~15歳	(三つの誘惑以前)
		母モニカの信仰と受洗の延期			
(B)	2巻	悪しき仲間との交際		16歳	肉の欲望
		「梨の木の実」の盗み			
(C)	3巻	『ホルテンシウス』と聖書への失望		17~19歳	目の欲望
		マニ教への入信			
(D)	4巻	内縁の女性との出会い		19~28歳	世俗的野心
		物的なものに囚われ霊的なものを見ない			
(E)	5巻	ファウストゥスとの邂逅と失望		29歳	
		アカデミア派の懐疑主義への傾倒			
		ミラノでのアンブロシウスの説教			
(D')	6巻	アンブロシウスによる聖書の霊的意味の開示		30歳	世俗的野心の克服
		内縁の女性との別れ			
(C')	7巻	「プラトン派の書物」と聖書の研究		31歳	目の欲望の克服
		マニ教との決別			
(B')	8巻	善き仲間との交際		32歳	肉の欲望の克服
		「無花果の木」の下での庭園の回心			
(A')	9巻	修辞学教師を退く		33歳	(三つの誘惑以後)
		受洗と母モニカと共なる信仰			

[表1] 17

注

- 1 当該書籍の日本語での呼称には『懺悔録』や『告白』などもあるが、本稿では加藤が使用した呼称に合わせ『告白録』と呼ぶ。
- 2 本稿ではこれを「自伝箇所」と呼ぶ。
- 3 キアスムス構造は、交差対句構造、交差対応的配列法、集中構造などとも呼ばれるが、本稿では便宜上、キアスムス構造と呼ぶ。キアスムス構造に関する説明は2節で行う。
- 4 O'Donnellの説と、これに基づく知見を加えたキアスムス構造については2節で述べる。
- 5 裏返し構造については3節で説明する。
- 6 ここでのEは、前半と後半の折り返しの要素である。一方、折り返し部分に要素を持たないキアスムス構造も知られている。研究者によっては、折り返しに要素を持つか持たないかで呼び名を区別する場合があるのだが、本稿ではこれを区別しないこととする。
- 7 本稿ではこれを「キアスムス構造の特徴」と呼ぶ。
- 8 「自伝箇所」では並行法も使用されている。
- 9 山田論文の表（本稿では表1に相当する）の項目で、宮本論文に基づく要素を、本稿では「宮本の説による要素」と呼ぶ。
- 10 山田論文の表のなかで、O'Donnellの説に基づき山田が追加した項目を、本稿では「O'Donnellの説による要素」と呼ぶ。
- 11 本稿では、「異郷」を、「故郷」の対語として見做す。
- 12 山田は『告白録』の1～9巻でのアウグスティヌスの神と魂を探求する道程について、以下のように述べている^[1]。「O'Meara (2001 [1957])とKnauer (1957)の説を受けてO'Connell (1969, pp.11-22)は、『告白』の物語を、その本来の在り方である神の観照から離れてこの世界の内をさま迷っている魂が再び神を見出すまでの「魂の遍歴」[peregrinatio animae]であると規定する。このように見る時、『告白』1-9巻で語られるアウグスティヌスの自伝的物語は、8巻のキリスト教への回心を軸にした知的内省的な物語として捉えられる。」
- 13 この構成に関する初出論文は『Folclor Literar』誌に掲載された「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」であるが、筆者はこれを入手できなかった。本稿ではポップのこの文献が掲載された別

の論文^[12]を引用した。

- 14 この他にも裏返し構造を異郷訪問譚に当てはめた報告には、韓国の異郷訪問譚を対象とした依田論文^[13]や、異郷訪問譚形式によるアニメーション映画作品である「千と千尋の神隠し」を題材にした大喜多論文^[14]などがある。
- 15 本稿では、これを「特徴A」と呼ぶ。
- 16 本稿では、これを「特徴B」と呼ぶ。
- 17 「修辞学の学習」から「受洗と母モニカと共なる信仰」に至る要素が記された列が「宮本の説による要素」であり、「(三つの誘惑以前)」から「(三つの誘惑以後)」・「オスティアの上昇体験」に至る要素が記された列が「O'Donnellの説による要素」である。

引用文献

- [1]加藤信朗. アウグスティヌス『告白録』講義. 知泉書館, 2006.
- [2]宮本久雄. アウグスティヌス文学のヘブライ的地平—『告白録』第一～九巻における「キアスムス(交差対応的配列法)」構造—. パトリスティカ. 2009, 13号, 142-148.
- [3]山田庄太郎. アウグスティヌス『告白』のキアスムス構造に於ける新プラトン主義. 宗教学・比較思想学論集. 2012, 13号, 45-57.
- [4]O'Donnell, James J. Augustine, Confessions; Text and commentary, 3vols., Oxford: Clarendon Press. 1992.
- [5]荻野弘之. QUAERE INVOCANS—アウグスティヌス『告白録』冒頭における探求の構図—. 東京女子大学紀要論集. 1989, 40巻, 1号, 1-16.
- [6]大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, 2号, 1-9.
- [7]大喜多紀明. アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造—異郷訪問譚によらない事例—. 北海道言語文化研究. 2016, 14号, 45-72.
- [8]中澤啓介. 「主の祈り」について. 福音主義神学. 2005, 36号, 31-57.
- [9]森彬. 聖書の集中構造 上 旧約篇. ヨルダン社, 1991.
- [10]水野隆一. アブラハム物語の構造 I. 神学研究. 1996, 43号, 1-16.
- [11]勝俣隆. 異郷訪問譚・来訪譚の研究—上代日本文学編. 和泉書院, 2009.
- [12]Pop, Mihai. “Coordonate structurale ale

folclorului literar”. Folclor literar românesc. 1990, p.77-92.

[13]依田千百子. 韓国の異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1982, 5号, 47-57.

[14]大喜多紀明. アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問譚構造について—ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合. 国語論集. 2014, 11号, 77-89.

Abstract

The structure of Augustine's "Confessions" as 1-9 consists of chiasmic structure. In this paper, it was considered the cause of why this composition was brought to this text. Two reasons were indicated here, (1) based on the Augustine's soul, (2) Influence of the character of *Ikyou-houmon-tan*.

(受付日：2016年10月2日, 受理日：2016年10月11日)

大喜多 紀明 (おおぎた のりあき)

現職：一般社団法人地域コミュニティ談話会 代表理事

東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了。理学修士。

専門は民俗学・言語人類学。

主な論文：樺太アイヌの「トゥイタハ」に見出される交差対句。年報人類学研究。2013, (3), p.169-191.

アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造—異郷訪問譚によらない事例—。北海道言語文化研究。2016, (14), p.45-72.